

韓国の学校舞踊教育の変遷と指導方法の歴史

—中学校・高等学校を中心に—

お茶の水女子大学大学院 玄 悒禎

I 研究目的

本研究は、1960年以後の韓国における教育課程^{注1}の理念の変遷とそれに対応した創作舞踊教育の指導方法の歴史、その指導内容に焦点をあて、その問題点を分析するとともに、望ましい創作舞踊の過程を探ることを試みたい。

II 研究方法

学校舞踊教育の指導方法について、1960年代から現在までの年代区分として、舞踊教育の目的と指導方法に沿って「第1期：既成作品による舞踊教育から創意力育成への舞踊教育（1963-1973）」、「第2期：民俗舞踊と創意力育成の舞踊教育（1973-1987）」、「第3期：創意力育成の舞踊教育（1987-1997）」、「第4期：個性伸張を目指す舞踊教育（1997-現在）」に区分した。

第1期には「第1次教育課程」と「第2次教育課程」が、第2期には「第3次教育課程」と「第4次教育課程」が、第3期には「第5次教育課程」と「第6次教育課程」が、第4期には「第7次教育課程」が該当する。

これ以外に教育課程に関わる「指導書」、「実践研究」、「一般芸術舞踊に関する文献」、「現場教師に対するインタビュー」を参考にした。

III 結果

韓国の学校舞踊教育の変遷の過程においては、社会的・時代的な影響を受けながら身体表現文化をいかに発展させていくかに取り組む上で、様々な学習内容が示されている。そこでは、既成作品を教材にすることから創意力中心の創作舞踊教育へ転換したことが大きな特徴である。創作舞踊活動では、欧米、特にアメリカの影響を受けながら、徐々に韓国的な独自性に発展していく。

しかし、「教師用の指導書」や現場教師に対するインタビューから、現実には、「教育課程」の目指すものと、現場での実践とのギャップが多いことがうかがえる。つまり、創作舞踊の環境や教師の指導能力が充実していないこと、特に動きづくりの段階のテクニック不足が報告され、これらの研修プログラムの必要性が示唆された。

IV まとめ

本研究では、1960年代から1990年代までの「創作舞踊教育」の流れをみた。この期間は時代的・社会的な影響を受けながら、既成作品を教材にすることから創意力中心の創作舞踊教育へ転換したことが大きな特徴であった。第7次教育課程(1997

—現在)は、さらに個性を尊重し、選択授業により、主体的活動の育成に力を入れるようになった。しかし、現実には、教育課程の目指すものといえる作品づくりの前段階におけるふさわしい動きを生み出し、それを変化・発展させ、作品化させていく段階の指導が詳しく取り入れられていない。従って、教育課程の目指すものの理想としては、これらの現場での実践問題を解決していくべきである。

〈参考文献〉

- 韓国教育部 (한국 교육부)^{注2}
1963-1997『体育科教育課程체육과교육과정(小・中・高校)』ソウル：教育部。
金和淑(김화숙)キム ファ スッ
1985「舞踊創作」能力の向上のためのプログラムの開発及び適用に関する研究 ソウル：漢陽大学大学院博士論文。
玄悒禎(현희정)ヒョン ヒ チョン
1989『学校における舞踊教育の日韓比較研究—学習指導要領の変遷と現状調査にもとづいて—』お茶の水女子大学修士論文。
2000『韓国未来舞踊学会研究論文』5集：189-238。ソウル：未来舞踊学会。

^{注1} 教育課程は、日本の学習指導要領に当たる

^{注2} 教育部は、日本の文部科学省に当たる